

令和 6 年度

大阪大学

一般選抜（前期日程）

解答例又は出題の意図

国語（L）

I

問一 「科学的説明」は、変化を複数の物理量の関係からとらえる。特に時間と空間の差を極小化してとらえるため、因果の説明としてはすべてが連続的になり、その意味で正常に機能しない。「物語的因果性」は、科学的には連続的である事象に人間の関心によって切れ目を入れたうえで因果関係として把握する点において異なる。

問二 人間が自らの関心によって物語ることで原因—結果の関係が成り立つとき、因果関係は変化の切れ目を持たない脳状態ではなく、非連続的な変化としてとらえ得る心的状態にこそ近似する。個人の行為は心的状態を帰属させることができるメゾスコピックな事象であるから、因果概念の原型といえる。

問三 時空的に完結した出来事である行為に対する責任は、現在から非連続的な過去において行為が存在したことを前提する。過去と現在を区分し、その両者を因果関係に基づいて説明できるのは物語り行為によるものであるという点で、責任と「物語り」には結びつきがある。

問四 人間は自由に行為する一方、行為に対する責任を持つ。責任は、過去と現在の結びつきを因果関係としてコミュニケーションの形式で説明する「応答可能性」を果たすところに成立する。この物語る能力こそが人間を動物や機械と区別すると言えるが、その場合逆に条件次第で人間の境界はゆらぐとも言える。

II

問一

実際には焼けてしまう喉の中間部の軟骨の代わりに、仏に似た形状の骨を喉仏と呼び習わす、遺族を慰め労わる慣習に長年親しんでいる葬儀場の職員は、いつも通りに説明したが、遺族の母親にそれは「嘘」だと直接的に幻想を打ち破る指摘をされたために驚き、すぐには返答できなかったから。

問二

「架空犬」の「首を絞めて殺した」という母親の言動は、「架空犬」の存在という幻想を共有できない佐知子にとっては、想像を絶する言動だが、さらに「架空犬」を信じていた母にとっては、実在する犬を殺すに等しい残酷な行為であろう。「架空犬」のいない生活に戻った母親は、「架空犬」という幻想から脱け出たのではなく、その幻想により深く依存している。その事実、佐知子が恐れと驚きを感じたため。

問三

医学的には喉仏ではない骨を「喉仏」とすることが許されるのなら、ネクタイが誰のものであれ、母の首を飾る装身具として扱うことも可能だろう。母が「架空犬」の首にリードを巻くように、佐知子もまたネクタイを母の遺骨にかけることで、死んだ母の存在を感じてみようと思ったから。

問四

ネクタイを「しっぽ」という生き物の一部にたとえることは、無生物である装身具を生命ある生き物として想像させる。「架空犬」が首にリードを巻かれることで、生きているかのように扱われるように、リードのような無生物が、生きてもおらず存在してもいないものを生きたものと化す支えとなることを暗示するとともに、不在物や無生物を生きているかのようにとらえる幻想のあり方それ自体を浮き彫りにする効果がある。

III

問一

- ①恋しく思っていることさえ知られることのない
- ②姫からの返事が突き放したようなものだったからといって、諦めがつくような恋心ではなかったので、その後も、真玄は姫にたびたび文を送った。

問二

山城守正素の、真玄を娘の婿にすることなど思いもよらないということばを受けて、押し寄せて姫を奪いとり、正素に恥をかかせようと言っている。

問三

千鳥が、真玄にあまりに熱心に仲介を頼まれるので、真玄に一筆書いてもらって、何とか姫の便宜をうかがおう（文を渡そう／姫からの返事をいただいてこよう）と言っている。

問四

近江にある伊香具の海の「海松布」ではないが、どういうわけか、自分（文の書き手である真玄）は姫に会う機会、「見る目」もないのに、思いが募っているという心情を訴えている。

問五

⑧の和歌によまれた、真玄の、姫を思うあまり流す涙がいつのまにか淵となり、その涙の中で浮き沈みするほどである、という思いを受け、あなたが涙の中で浮き沈みしようとも、逢う機会はないでしょう、と拒絶している。

問六

「月夜がらす」「音にたててなく」は、文の書き手である真玄が、人でなくからすであることを強調する表現効果がある。

IV

問一

わたしは鳳凰がいると聞いて久しい。いま、こうして本当に見ることができた。あなたはこれを売ってはくれまいか。

問二

通りかかった者（旅人）は鳥を楚王に献上しようとした。

問三

人々はみな、本物の鳳凰だから、王に献上するのがよいと考えた。

問四

しきしゃこれをわらは（わ）ざるはなし。

問五

旅人は、山鶏を鳳凰だとだまされて言い値の二倍の金額を支払った。また、旅人がその山鶏を献上しようとしていたことを聞きつけた楚の王は、旅人が購入した額の十倍にも相当する報奨を旅人に与えた。このように、あまり価値のない物や行為に対して、過大な評価を与えた旅人や楚王の見識が、真実を知る者には愚かしく滑稽であると感じられたから。